

問題予測とよりよい行動への支援 — 高次脳機能障害を持つ方への職業訓練実施例 —

国立職業リハビリテーションセンター 上田 典之

1. まえがき

国立職業リハビリテーションセンター（以下職リハという）の職域開発科では、高次脳機能障害などを抱え就労を目指していながらその目的を果たせなかった方々が、全国から集まっている。就職を目指した職業リハビリテーションを受ける一年を通して、目的を果たすため努力を重ねている。しかし、障害特性から、新しいことにチャレンジしても結果が出ない、自発的に行動を起こすことが難しい、同じ失敗を繰り返してしまう、積み重ねた経験が実際の場面で生かせない等の困難を持ち合わせているために、就職を目指すという初期の目標でさえ見失いがちである。

本論文では、職業訓練指導員の立場から、彼らがスタッフやほかの訓練生の力を借りながら、自分を成長させていく方法を習得する過程とともに、「よりよくする」ための努力を支えるにはどうしたらよいかを考えていく。

平成14年4月から高次脳機能障害をもつ方を対象に、職リハ職域開発科が行ってきた実践例を報告する。

2. 本論文の目的

米国でのリハビリテーションの考え方をはじめ、国内でも就労を視野に入れたさまざまなリハビリテーションの考え方は存在してきた。本論文で取り上げる、よりよい行動へ導く支援の考え方は、自己選

択を基軸にした支援のあり方であり、高次脳機能障害は個別性が高いものの、個別性を吸収し一定の有効性があるものと思われる。

本論文では「よりよい行動へ導く流れ」について考察する。

3. 先行研究について

3.1 先行研究

ニューヨーク大学医療センターのBen-Yishay Y・Diller L・Daniels-Zide E・訳：大橋正洋¹⁾らによる米国での神経心理学的リハビリテーションによると、リハビリテーション後の改善については段階的な介入の必要を示している。

(1) 自己認識, 柔軟性, 理解の段階

プログラムの初期においては、望ましいレベルの自覚, 柔軟性, 理解が養われるまで、多様で組織化された相互に強化し合う訓練を、個人およびグループで受ける。

(2) 代償, 調整, 受容

障害の受容がどれだけできているか、あるいは治療を継続する必要があるかを評価する。

(3) 再統合, 意味づけ, 同一性

コミュニティに再統合し、人生の新しい意味を発見し、自己同一性を再構築する。

3.2 本論文との違い

米国のリハビリテーションの流れに基づきながら、職業訓練場面での応用について本論文では取り上げ

る。統合失調症などの心理社会療法の1つ、社会生活技能訓練 (Social Skills Training) (以下SSTという) の手法、福祉工学的な道具の活用と開発、生産工学の考え方による作業改善からヒントを得ながら、取り組んできた具体例を通し、示していく。

4. 内容

4.1 高次脳機能障害とは

大橋 (2001)²⁾ によると高次脳機能という用語は、20年ほど前からリハビリテーション領域で使用され、最近では、メディアや行政にも取り上げられるよう

表1 訓練場面で現れた主な障害特性

記憶	学んだことを短時間で忘れてしまい新たなことを学習していけない。
注意	1つの課題に集中して取り組めない(逆に1つの課題に集中し過ぎてほかに注意が向かない場合もある)。
遂行機能	目標や計画を立ててもそれに向けて準備,実行していくことが難しい。
情緒や行動	感情のコントロールができず,ささいなことで不安になったりあきらめてしまう。

表2 困りやすいこと, 困ったこと

Microsoft Word,Excel	操作がわからず作業が停滞。
伝票のものを集める (ピッキング)	間違っただけを袋詰め。
品質検査	標準時間と比べて2倍くらい時間がかかる。
軽作業 (コピーを頼んだときなど)	求めたものと違っている。
忘れてる	毎日の仕事の手順。人の名前。約束したこと。40分前のことでも思い出せない。
時間がかかる	作業の準備だけで,訓練時間の7割を占めてしまう。
会話	伝えたいことをうまく言葉にできずにいると,最初に自分が何を言いたかったのかわからなくなる。話の流れがよくわからなくなることがある。
漢字,九九	小学校程度のことが思い出せない。メモに時間がかかる。
気分・感情	感傷的になって落ち込む。急に本気になってやり出すことがある。天候によって気分の浮き沈みが激しい。ちょっとでもつまずくと頭をかき乱して落ち着かなくなる。
遅刻	毎日1,2分の遅刻。休憩のとき2分前には戻るといって自分で作ったルールを守れない。
うとうと	15分くらい目を閉じてうとうとしてしまう。
体調	脱力感があり,活動する気にならない(無気力のようなもの)。
手順が一貫しない	自分の中では違うことをやっているつもりでも周りから見れば同じことを繰り返している。問題を解くに当たって,手順が一貫していない。
自分のおもいこみでなんとかしようとする	道具を使った方がいいにもかかわらず,できるだけ自分の力で問題を解こうと考えてしまい,人の意見が聞けず結果が出せない。代償手段を自発的に使えない。

になってきた。失行,失認,記憶障害,注意力の低下,集中力の低下,人格変化,情緒や行動の障害などの問題から,生活を管理できない,障害を自分で自覚できないといった問題があると指摘されている。高次脳機能障害は,事故や病気が原因で記憶,思考,言語といった脳の高いレベルの機能に障害を伴っているため,あまりなじみのない障害であると同時に「目に見えない障害」といわれている。

4.2 訓練場面での問題と困ったこと

訓練場面では,表1のような問題が現れている。

技能訓練で実際に困った事例は,表2のとおり。

以上の事例は,一人ひとりの障害特徴を集めてきたが,生活指導,国語算数といった基礎学力の低下,作業効率の悪さ,休みがち,学習を積み重ねても成果が出にくい等の問題が,実際の訓練場面でも現れていることを表している。

このような状況を支援者が知り,分析して本人がこの問題を理解しているか否かを確認しながらよりよくしていくという気持ちを育てるよう支援する。

4.3 問題行動に合わせた指導の重点

さまざまな問題行動が障害によって引き起こされてくるが,これを受けて,支援スタッフが指導の重点をどこに置くか,また,それへの対処行動として,どのような代償手段を講じていくか検討した。図1のように指導上の配慮の割合をグラフ化,それに対する有効な代償手段を明記することで,共通認識を図りスタッフ間の認識のズレを補正,わかりやすい

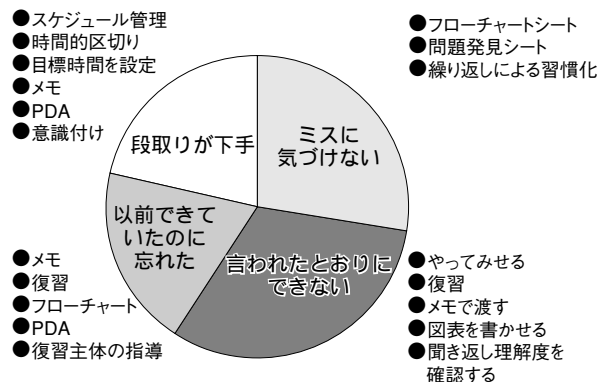


図1 指導上の配慮の割合と具体的代償手段

支援が行えるよう工夫した。

4.4 指導の特色

困難にぶつかる度に、指導員の考えを指示するだけでは、彼らの自尊心を傷つけ、訓練に対する意欲の低下を招き、指導上好ましくない状況になる。これを避けるために、訓練生自身に自分の取る行動の意味をよく理解させたうえで、問題の解決策を自分の頭で考えさせるように支援する。自分の頭で考えるよう支援することで、訓練に対する意欲を高めることが可能になると考える。そして、具体的な目標を自分で発見し、それに向かって努力するように導く。

4.5 援助付き自己決定と一人ひとりの目標

寺谷（2001）によると³⁾精神障害を持つ方々が、地域社会での自立生活の実現と、完全参加を援助するために、コミュニティワークの有効性が示されている。このなかでキーとなるのは、当事者の希望や意見をよく聞き、自己決定を尊重することである。そのうえで、さまざまな社会資源をどのように活用していくべきかが問題になると指摘している。

この考え方を参考にして、自分の苦手なところを補うために、代償手段をどのように活用していくのか、一人ひとりの意見を聞いて自己決定にゆだねる。このとき、指導員の考えと大きなズレが生じることがある。そのギャップをわかりやすく本人に説明したうえで具体的手法を提示し、無理なく実行できるものを選んでもらう、自己決定のプロセスを大切に

する。Bさんはメモリーノートを利用、Cさんは携帯の機能を利用する等、自分の使いやすい代償手段を選ばせ、自分からよりよくしていこうという気持ちを育てながら、必要なときに代償手段が使えるよう支援をする。

4.6 代償手段

障害特性により、適切な行動を取るのが難しく、問題行動となってしまう。これを予測し、適切な対処行動がとれるように、精神論で解決を図るのではなく、道具の利用や手順を工夫することで解決を目

指す考え方である。

不適切な行動を取ってしまうため失敗を繰り返す。しかし、失敗を繰り返さないように気持ちのうえでは努力している。このため、失敗の傾向を予測し、失敗を防ぐ対処行動として具体的な代償手段をとることを訓練場面で体験学習していく。

(1) ミスから学ぶ手法

日常の行動で問題行動として表れていることを、本人にわかりやすく説明し、認識してもらうよう工夫する。

わかりやすく問題点を整理できるよう「問題発見シート」(図2)を利用する。

支援スタッフとともに「問題発見シート」を作成していきながら、問題点の整理、対処行動の取り方を指導する。改善策を記入するとき、本人は「がんばる」といった精神論に頼るため、具体的な手法を記入させるように、支援スタッフがヒントを示す。このように、よりよくするための改善点を発見させ「問題発見シート」に整理し、適切な行動と障害を補えるような作業手順を体験させる。そこで経験・学習し適切な行動の習慣化を目指す。

(2) 適切な対処行動がとれるように手順を決める

ミスなく、効率的に行うための工夫として生産工学で用いられている手順のマニュアル化と、工程分析による手順の最適化を行う。

作業の手順をわかりやすく説明する工夫として、フローチャートを参考にした、フローチャートシートを使用する。

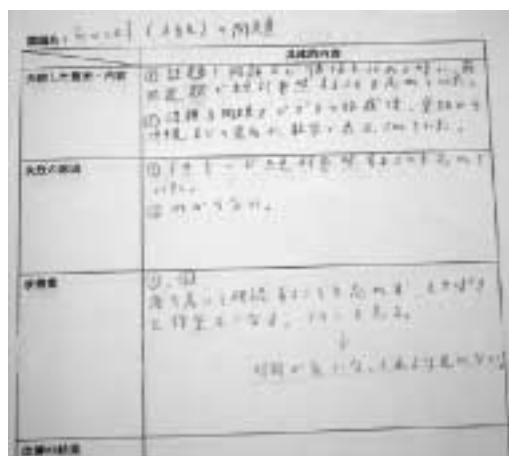


図2 問題発見シート

判断要素が複数あるものをわかりやすくするため、手順、確認の2要素に簡略化した「フローチャートシート」(手製マニュアル)を作成し、自分で記入できるように指導する。図3、図4に例を示す。

フローチャートシートはすべての訓練場面で作成するように指導する。

(3) 忘れてしまっていることを認識できるように
障害のため記憶の抜け落ちがあり、困った事態になっても、本人は記憶がどれほど抜け落ちているか実感が持てていない。もの忘れシートは「もの忘れ」を実感できるように工夫したものである。もの忘れしたときに、それを指導員が指摘し、記憶の抜け落ち具合を「言われたら思い出せた」「もやもやしている」「忘れてしまっている」の3段階に整理して、覚えていた度合いをお互いがわかるように工夫する。図5に、もの忘れシートの例を示す。



図3 フローチャートシート (用紙)

△「(3級課題3問題1)の印刷方法!」

- 印刷する範囲をカーソルで選択する
- ファイル→印刷範囲→印刷範囲の設定を選択
- 印刷範囲が確定される
- ファイル→印刷プレビューを選択
- 設定をクリックしてページタブを選択
- 印刷の向きを選択して、「次のページ数に合わせて印刷」をクリック
- 余白タブを選択し、水平・垂直をクリック
- 左右の余白を指示どおりの大きさにする
- ヘッダー/フッタータブを選択し、ヘッダーの編集をクリック
- 左側、右側に必要事項を入力
- フッターの編集をクリックして右側にカーソルを移動し、日付ボタンをクリック
- 「今日の日付」が入力される
- 印刷をクリックして、印刷ダイアログを表示させ、OKを押す
- 印刷される

▽終わり

図4 フローチャートシート (Excel版)

日付	時間	内容	氏名
17/11	14:15	自己研修にも取り組むことになりました。	A・C
		もの忘れシートを作成し、記入しました。	A・B・C
17/11	10:00	研修参加費を申請書から提出したか確認しました。	B・C
17/11	19:15	研修参加費を申請書から提出したか確認しました。	A・C

図5 もの忘れシート

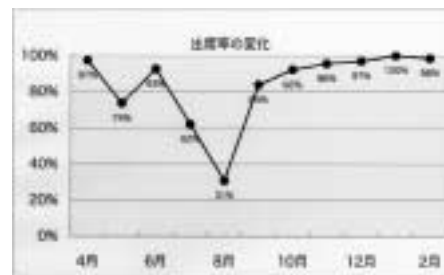


図6 9月から寝る時間为目标に取り入れた

(4) 生活のリズムを整える

遅刻が絶えない、訓練時間に集中できない、体調不良が続くなどの問題行動がある場合、生活リズムを整えることで、その問題を改善できると知っていても、その考えを続けることが難しく、何ヵ月経っても問題を改善できないという傾向がある。この問題を解決へと導くためには、急かして大きな目標を立てるのではなく、本人が無理なくできる小さな目標から始めていくことが有効である。例として「寝る時間を決める」をあげる(寝る時間を決めたBさんの結果を図6に示す)。そして、よりよくなってきたら、それを本人にわかりやすく伝え、よろこびを感じていく体験が成功への近道だと思う。

4.7 訓練手法について

(1) 代償手段獲得訓練(目標作り)

職リハ職域開発科では毎週月曜日に実施している。SSTの手法を参考にし、スタッフから指示を受けたから行動するのではなく、メンバー自らが自発的に課題に責任持って取り組めるよう、力を与えていくエンパワーメントの考え方が特徴である。

このエンパワーメントの考え方を取り入れたのが、代償手段獲得訓練である。

ここでは、グループワークによって行うが、一週間を振り返ったなかで、自分の考えや希望、うまく

表3 目標設定

	計画	実行	結果
1	フローのはじめに「必ずフローを見る」と付け加える←全作業をフローを見て行う。	PDAに「必ず見る」と入れた。	フローを見て行えた。自己評価100点。
2	問題発見対策シートのまとめで、自分にもっともよい代償手段を見つける。	付せんをつける、定規を買った。見本を参考にする。	付せんをつけることができた。自己評価90点。

行えたこと、行えなかったことをグループの前で発表し、意見をぶつけ合いながら、よりよくするにはどうしたらいいのか、メンバー同士でどのような代償手段を使っているかを話し合い、励まし合いながら、みんなで楽しく学んでいけるように工夫した。

実践方法としては「よりよくするために」を合言葉に、指導員と訓練生が一緒になって発言し、その発言に対してプラスのフィードバックを返していく。代償手段を使うというのは、障害を補足するための道具を使うということであると同時に、自己決定を尊重した働きかけをしながら、よりよくしていく努力を具体的に示すということである。

実際に立てた目標は表3のとおりである。

(2) コミュニケーション訓練

会話をしているも、相手の人が何を話したのか、自分が何を話したいのかがわからなくなる、指示の内容を聞きそびれるといった問題を抱えている。このため、コミュニケーション訓練は相手の話をメモに取る、会話の内容をまとめる、自分の気持ちや考えをみんなに話し、意見交換ができるようになることを目的に実施する。

職リハ職域開発科では毎朝実施し、訓練生がテーマを決め、指導員も交え一緒にスピーチをする。実際に訓練生が記入した白板の例を図7に示す。

5. 訓練の結果

5.1 修了生のその後

修了生 4名中：就労2名、求職中2名。受け入れる企業側の対応として指導担当者を決めていただき、その方に修了生のことを理解・配慮してもらえよう環境作りが必要だと思われる。よりよくす



図7 スピーチの例（自分の長所、目標など）

るためには仕事の過程をきちんと評価し、それに基づいて日々支援を行っていくことと、本人、家族、支援者の結びつきの強さがポイントとなる。就労後も障害特性である自信を失いやすい点を支援者が十分に理解するために、表4のように支援ノウハウをまとめた。

5.2 修了生の感想

- (1) 会社では、自分に何が求められているのかということを考えなければならないことがあるので、自分に求められているのはどういうことなのかということを考える訓練を行うと、企業に就職してから役に立つと思います。
- (2) 訓練生が希望することをどんどんやらせてほしい。職域開発科での1年間は自分にとっては短いものだったと思います。もう少し在籍できるのであれば、より自分自身を磨くことができましたと思います。

6. 考察

6.1 問題予測

代償手段は困ったときの対処行動として有効のほかに、同じ失敗を繰り返さないための支援のあり方として利用できる。

問題行動を予測し、未然にそれを防ぐことを目的として、支援を講じていく。それを重ねていき、さらに代償手段を講じることで、よりよい行動を成長

表4 困ったときの対処ノウハウ

場面	状況	よりよくする	ポイント
ミス	ちょっとしたミスは誰にでもあります。しかしBさんは左1/4の視野が欠けているため、そこにある文字や項目に気づけず2度3度と繰り返してしまいます。	問題となる行動があった場合、よりよくするためにどうしたらよいかを問題発見シートに書かせる。このとき、本人にどうしたらよいかを考えさせ、本人の口からその案を出せるように支援する。	人に指図されるより自分で考えさせた方が自尊心を傷つけず改善はスムーズに行く。よりよくするように本人にも努力させ、自己決定を尊重する。
混乱する	実際にやらせてみると、ポイントをはずしていることがある。	復唱させ、手順を確認させる。一度にたくさんの指示を出さないようにする。	複数の人から指示を出すと混乱するので指導担当者を決めておく。指示をメモにして渡すのも課題を整理しやすく時間短縮につながる。
忘れる	本人は100%の記憶を保持できていないことの自覚がない。これが原因で、思いこみでの行動が目立ってしまう。	簡単なメモやスケジュールは携帯電話の機能を利用する事も可能である。メモ用紙を使うときは、どこに書いたかを忘れてしまう場合があるので、書くものを1つに決め、いつも同じ所に整理しておくことよい。	ノート、携帯電話、書くものは決めておく。
うまくいかない	複数の仕事を同時に進行させていくことになるが、いろいろな人がかかわってくると混乱してくるようである。結果として納期や期限を守れず段取りの悪さが目立ってしまう。	優先順位や手順はフローチャートにまとめておく一人でも順調にできるようにする。	可能であれば指示は同じ人間から出すように決める。フローチャートで整理するのが有効である。短期的な目標を作って、よりよくするために考えさせる。
気分・感情・行動	疲れやすい、表情が硬い。	寝る時間を決め、守る。	気分の低下に自分では気づいていないことがあるので指摘する。
	不必要な過ちを繰り返す。	どういう不注意、ミス、間違いが多いか指摘する。そうすることで予測が可能になり未然に防げる可能性が高まる。	未然に防ぐことで、作業が成功し、さらなるやる気を生み出すことができる。
	注意の持続ができない。	作業に入る前に自分でその時間内にできるであろう作業目標を作らせておく。	本人がやりやすいよう、課題の順番を変える。集中しやすい時間帯に、課題を行う。
	話しかけても、答えない。	繰り返し根気よく指示をする。	話をしても返事やあいづちをしなかった場合は、まず聞いていないことを頭に入れておく。
	話しかけても、答えない	状況に応じては目を引くもの、興味の向いたことからやっていくことを、容認する。	ただし一人社会人として守るべきことだけは、必ず守らせる。
	順序立てた行動ができない（計画した行動を予定どおり実行に移せない）。整理整頓が出来ない、よく物をなくす。	片づけ自体は嫌ではないが、一度ため込むと、片づけに相当の時間がかかる。まとめて掃除するのではなく、こまめな整理整頓を促す。	「物」を増やさない。一連の動作をまとめて行うように指示する（例：引き出しを開ける→必要な物を取り出す→引出しを閉める。／決して、出したものを片づける所まで続けて要求しない。それは、別のまとまりとする）。
	物を紛失してもそれを人のせいにする。	渡すほうが確かに渡したということをメモする。	渡した日時のメモをしておく。

させることが可能となる。この問題予測と代償手段の関係を図8に示す。問題行動を予測し、それに対する代償手段を活用することで、右図のように適切な行動がとれるようになり、さらによりよくするための成長を促すことができる。

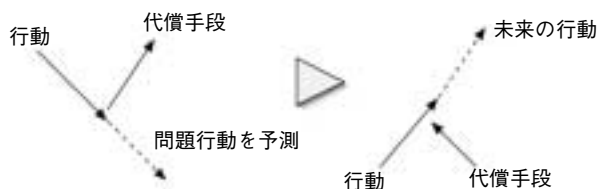


図8 問題予測と代償手段

6.2 よりよい行動へ導く流れ

障害特性により、状況に応じた適切な行動がとれないため、問題が発生する。よりよい行動をとるためには、本人の主体性を尊重することと、問題を予測するという情報の処理を、並列に考えられるようにすることが重要である。判断能力を高めると同時に自分の障害特性をふまえ、問題を防げるような対処行動を主体的に実行できるよう、よりよい行動へ導く流れとして図9に示す。

- (1) 質問・確認する習慣を身に付けていく。
- (2) 短期記憶は比較的良好でも一度に覚えられる量（ワーキングメモリ）に制限があるため、指

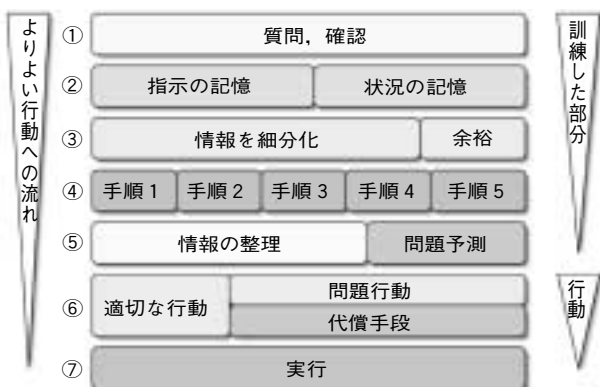


図9 よりよい行動へ導く流れ

示の記憶、状況の記憶の量は障害状況により異なる。

- (3) 情報を細分化し、重要な点を見いだすことが苦手である。理解しやすく指示を与える配慮が必要。精神的余裕が無いと1つのことにこだわってしまうので、要求水準に余裕を持たせる。
- (4) 学習し蓄積した経験が、記憶の障害などから完全に再生できない。蓄積した経験をフローチャートシートに保存する代償手段をとっている。
- (5) 一方で、フローチャートシートやPDAの情報を探し出せない場合がある。これを補完するには、ファイリングや問題発見シートも活用し、情報整理と問題予測を習慣化する。
- (6) 訓練を重ねることで、適切な行動がとれるようになるが、それでも失敗を繰り返しやすい部分には、さらに具体的な代償手段を講じていく。
- (7) 実行に移る。この経験をメモし記録に取るようにする。ポイントは、処理に要した時間を管理しフィードバックをかけることである。

6.3 結論

高次脳機能障害をお持ちの方々への支援において、問題予測と代償手段獲得、それを導く支援が、有効であることがわかった。職域開発科では、現在高次脳機能障害の特性を持った方々が、職業訓練を受けているが、彼らの障害特性を尊重した形で、自己理解と、援助つき自己選択を基軸とした対処行動ノウハウの構築と、支援のフローチャート、そして職業

リハビリテーションプログラムの構築を行っている。

6.4 今後の課題

本人だけでなく支援者の苦悩も理解し、彼らを支援する役割をどのように担っていくか、この障害への理解を広め、個々人の障害特性に合わせた支援ノウハウを構築していくことができるかが、修了生の就労を維持するうえで今後の課題となる。

7. おわりに

障害を抱えているからと安易に手を貸して、改善の手法を相手の意見も聞かず、押しつけてしまうことは、彼らのプライドを傷つけ、信頼関係を壊してしまう危険性があると思う。問題を予測したうえで、相手の気持ちを尊重し、よりよくするための考えを抵抗なく、自然に受け止められるように支援する。人から教えられるのではなく、自分から学んでいこうという前向きな気持ち、明るさを彼らを取り戻せるよう、努力できればと思う。

成果をこのようにまとめられたのは、職リハ職域開発課チームのみなさま、職域開発科で精いっぱい職業訓練に取り組んだ訓練生のみなさまのおかげです。深く感謝いたします。

〈参考文献〉

- 1) Ben-Yishay Y・Diller L・Daniels-Zide E (訳：大橋正洋)：「米国における神経心理学的リハビリテーション」、『リハビリテーションMOOK4-高次脳機能障害とリハビリテーション-』, p.1~7, 2001.
- 2) 大橋正洋：「わが国における高次脳機能障害リハビリテーションの課題」、『リハビリテーションMOOK4-高次脳機能障害とリハビリテーション-』, p.8~11, 2001.
- 3) 寺谷隆子：「ノーマライゼーション-社会参加と地域支援システム-」、『精神保健福祉ビデオシリーズ5』, 2001.

